

報告

男性高齢者の“生きがい就労”の実態とニーズ —A島の当事者の語りから—

山口初代¹ 大湾明美¹ 佐久川政吉¹ 田場由紀¹

榮口咲¹ 大川嶺子¹ 糸数仁美¹ 坂東瑠美² 前泊博美²

【目的】 男性高齢者の新たな介護予防の支援方法を見出すために、A島の民泊事業に参加している男性高齢者の当事者の語りから“生きがい就労”の実態とニーズを把握することである。

【方法】 研究協力者は、A島の民泊事業に参加している男性高齢者4名である。方法は、民泊事業の就労内容と就労のニーズの語りから、キーセンテンスを抽出し、辻らの生きがい就労のコンセプトである【働きたいときに無理なく楽しく働ける】、【現役時代に培ってきた能力・経験が活かせる】、【高齢者の就労が地域の課題解決の貢献につながる】に照らして帰納的に分析した。

【結果】 生きがい就労の実態は、辻らの生きがい就労のコンセプト【働きたいときに無理なく楽しく働ける】、【現役時代に培ってきた能力・経験が活かせる】、【高齢者の就労が地域の課題解決の貢献につながる】を包含し、【共生の理解に貢献する】の新たなコンセプトが導かれた。生きがい就労のニーズは、民泊事業を《島の産業として組織的に取り組みたい》、《食事サービスの質を向上させたい》、《若い（身体機能）に合わせて民泊がしたい》であった。

【結論】 A島の民泊事業は、男性高齢者の生きがい就労につながっていた。生きがい就労のコンセプトに【共生の理解に貢献する】が加わっていた。男性高齢者は、地域の課題解決の主役としての役割が発揮できる存在であることを示唆していた。介護予防のために生きがい就労を推進するという新たな介護予防の支援方法が必要であると考えた。

キーワード：男性高齢者 生きがい就労 就労ニーズ 当事者 介護予防

I はじめに

超高齢社会を迎える現在、就労を生産年齢人口だけに委ねることには限界があり、高齢者の潜在している知恵や経験が見直され、労働力としての可能性が期待されている。2030年に高齢化率が30%を超える未来像を見据え、高齢者の生きがい就労が推進されている（鎌田：2012）。

生きがい就労は、高齢化社会に突入した1970年代、就労を通じて生きがいを得るという考えのもと、大河内によりシルバー人材センターの前身として事業化され、現在、全国殆どの市町村でシルバー人材センターが整備されている（秋田：1983；

宮地：2010）。生きがい就労に先進的に取り組んでいる辻（2011）によれば、「生きがい就労とは、現役時代の働き方とは一線を画し、【働きたいときに無理なく楽しく働ける】、【現役時代に培ってきた能力・経験が活かせる】、【高齢者の就労が地域の課題解決の貢献につながる】をコンセプトとしながら、セカンドライフの選択肢としてより多くの人により長く参加でき、高齢者だけでなく地域社会全体にとっても効果的な働き方と称する」と述べている。そして、「生きがい就労の効果として、高齢者にとっては、生きがい、自己実現、健康増進、収入・生計維持等であり、地域社会全体にとっては、労働力の拡大、地域の社会資源の拡大、知識・スキルの継承等がある」と示している。

¹ 沖縄県立看護大学

² いけま福祉支援センター

就労のタイプは、現役世代における生計維持優先・企業における就労を基盤とした生計就労と、生きがい優先・地域における就労を基盤とした生きがい就労がある（秋山・前田：2013）。男性高齢者は、これまで生計就労を軸とした社会システムにおいて、組織活動と生産活動を行ってきた。しかし、老いた今、地域のネットワークに馴染みにくく、閉じこもり等による孤立化や介護予防事業の参加率の低さが課題となっている（鳩野・田中：1999, 平井ら：2005, 大久保：2005）。

ところで、シルバー人材センターが整備されていない高齢化率46.3%の沖縄県小離島のA島において、男性を含む高齢者を主体とした島外の修学旅行生の民泊宿泊体験事業（以下、「民泊事業」とする）が行われている。民泊事業の就労は、男性高齢者にとっては生きがい就労になり、介護予防につながる可能性があると考えられる。生きがい就労による男性高齢者の介護予防を具体的に推進していくためには、A島での高齢者の生きがい就労の実態を把握し、地域のネットワークの中での就労ニーズをどのように捉えているのかについて検討する必要があると考える。

社会学者のSimmelは、社会を捉える視点のひとつとして当事者の視点の重要性を述べている（管野：2003）。高齢者は、社会から求める生きがい就労だけでなく、当事者の視点で生きがい就労をすることにより、サクセスフルエイジングの実現につながると考えられる。したがって、当事者である高齢者の語りから生きがい就労を捉えることにより、男性の新たな介護予防を検討するための具体的な方法が見出されると考える。

そこで、本研究では、男性高齢者の新たな介護予防の支援方法を見出すために、当事者の語りから生きがい就労の実態とニーズを把握することを目的とする。

II 研究方法

1. 研究参加者

1) 研究参加者の抽出

研究協力者は、民泊を総括しているB福祉支援センターが把握している「A島で民泊受入をしている65歳以上で男性高齢者」とした。そのうち、研究の主旨が理解でき、かつ質問内容に回答が可能であり、研究協力の同意が得られた4名が研究参加者となった。

2) 研究参加者の概要

年齢は、全員が「70代」以上の男性高齢者で、世帯構成は、独居世帯1名、高齢者世帯が3名であった。過去の職業は、漁業関係者が3名で、建設業が1名であった。民泊歴は、民泊事業が開始された平成23年から全21回受け入れている者1名、19回受け入れている者1名、17回受け入れている者1名、12回受け入れている者1名であった。

2. 研究方法

1) データ収集

調査実施の前に民泊事業の誕生の経緯、目的、内容について、民泊事業を総括しているB福祉支援センター長から口頭と資料で把握した。

研究協力者には、半構造化した面接質問紙調査を研究参加者宅で実施した。1回の面接は、60～90分で調査内容が把握できない場合には、日時を変えて複数回実施した。調査期間は、平成24年10月～12月であった。調査内容は、調査票に記載し、研究参加者の了解を得てICレコーダーに録音した。

調査項目は、研究協力者の概要、生きがい就労の実態、生きがい就労のニーズであった。

2) データ分析

データの分析は、研究協力者ごとの個票を作成し、調査項目ごとに面接調査で得られた語りを原文で抜き出し、原文の意味内容が変化しないよう

キーセンテンス化した。キーセンテンスの類似したものを集め、サブカテゴリー化、カテゴリー化し、辻の生きがい就労のコンセプトである【働きたいときに無理なく楽しく働ける】、【現役時代に培ってきた能力・経験が活かせる】、【高齢者の就労が地域の課題解決の貢献につながる】に照らして整理した。文中、語りの原文は「」、語りのキーセンテンスは“ ”、サブカテゴリーは〈 〉、カテゴリーを《 》、生きがい就労のコンセプトを【 】で示した。分析のプロセスでは、本学の老年保健看護研究会（老年保健看護の教員、大学院生、大学院修了生で構成）で討議し、データに不足のある場合には内容を補足するために再度面接調査を実施した。

3) 倫理的配慮

研究協力者へは事前にB福祉支援センター担当者を通して訪問の同意を得て、調査者が研究協力者宅に訪問し、研究の主旨と方法について説明を行った上で、研究参加の同意を得た。研究参加者として同意がなく研究に参加しない場合でも、民泊受入には不利益が生じることがないことを説明した。また、得られた全ての情報は本研究以外の目的で使用されず、研究参加者個人が特定される情報は公表しないことを約束した。

本研究は沖縄県立看護大学研究倫理審査委員会で承認を得た。

III 結果

1. A島の民泊事業の概要

A島は、人口は714人（平成23年3月31日現在）、20年前に本島との架橋がかかり、生活の利便性は向上したが、人口は減少の一途を辿り、高齢化率は46.3%と超高齢社会が先行し、限界集落に向かっている。昭和50年代までは遠洋漁業による鰹漁と鰹節生産が盛んで、現在でも漁師など海に関わる職業に従事している人が多い。五穀豊穡と大漁を祈願する豊年祭“ミャークヅツ”が200年以上に

渡り、受け継がれている。

民泊事業の目的は、「高齢者の出番・居場所をつくることで、元気な高齢者をつくり、介護を受ける年齢と要介護者の数を減らすこと、島に継続的に収入を得る仕事をつくることで若者を島に呼び戻し、高齢者の暮らしを支え、島の伝統文化、行事・神事を継承発展させること」（平成24年度沖縄県新しい公共支援事業実績報告書）である。

民泊事業の内容は、一民家で5人程度の島外の修学旅行生等を受け入れ、2泊3日、食と住を共にし、観光や漁業、農業、家庭料理づくり等の民家ごとの独自のプログラムを通して、A島での暮らしを体験させている。

平成23年度には平均年齢80歳の高齢者8世帯で生徒29名の受け入れを開始し、平成24年度は高齢者を含む43世帯で生徒2,172名を受け入れた。

2. 男性高齢者の生きがい就労の実態（表1）

男性高齢者の生きがい就労の実態は、【働きたいときに無理なく楽しく働ける】、【現役時代に培ってきた能力・経験が活かせる】、【高齢者の就労が地域の課題解決の貢献につながる】、【共生の理解に貢献する】の4つのコンセプトが導かれた。

1) 【働きたいときに無理なく楽しく働ける】

【働きたいときに無理なく楽しく働ける】には、《介護予防で老いに適応する》と《関わりを楽しむ》カテゴリーが抽出された。

《介護予防で老いに適応する》は、“子ども達の世話で疲れすぎないために、おかわりは自分でやるように指示する”、“子ども達の部屋の配置は、自分達（高齢者）の排泄行動がしやすいように行っている”、“買い物の量と種類が異なるので、メモをとるようにしている”と語り、〈身体の老化を意識して行動（する）〉していた。また、“子ども達とおしゃべりは、認知症予防になると思うので話すようにしている”、“買い物の量と数が多く

なるので、売店に行く回数を増やしている”、“民泊の仕事は高齢者の健康保持に役立つ”等と語り、

〈民泊事業は介護予防につなが（る）〉っていた。

《関わりを楽しむ》は、“島の案内をしながら、子どもたちの将来に役立つ話をしている”、“島の良さであり、希望もある釣りに連れて行くようにする”、“釣れても釣れなくても、釣りを通して自然との楽しみ方を伝える”等〈島の自然に触れ、互いに楽し（む）〉んでいた。

2) 【現役時代に培ってきた能力・経験が活かせる】

【現役時代に培ってきた能力・経験が活かせる】には、《異なる価値を受け入れる》と《培った経験を活かす》カテゴリーが抽出された。

《異なる価値を受け入れる》は、“若者の最近のトランプのルールはわからないが、仲間に誘ってくれるので断らずに子どもたちにルールを教えてもらって参加する”、“遅れて帰ってきた子どもに、お腹を空かせて待っている人の気持ちを伝える”等の〈心地よい関係性づくりに配慮（する）〉していた。また、戦争や歴史の話に興味を示さない子どもたちを、“戦争の話はもう少し大人にならないと興味がないかもしれないと思う”、“年齢が若いから歴史には興味を持てないかもしれないと思う”等の〈話題が合わなくても受け入れ（る）〉ていた。さらに、“食事のメニューは子どもたちと相談して決める”等、〈食事は好みを取り入れ（る）〉ていた。

《培った経験を活かす》は、“問題を起こしそうな子どもを早めに見つけるよう観察する”、“船で出かけるときは安全のために、毎回、友人（若者）に乗船を依頼する”等〈子ども達の安全管理を（する）〉をしていた。また、“子ども達が喜ぶ潮干狩りは潮だけでなく風や天気などを加え、判断する”等〈漁師の経験を活か（す）〉し、“井戸水で生活に困っていた頃に、国に水道事業の要請をした”等の〈生活の経験を活か（す）〉していた。

3) 【高齢者の就労が地域の課題解決の貢献につながる】

【高齢者の就労が地域の課題解決の貢献につながる】には、《家族と世代をつなぐ》と《島の今と未来をつなぐ》カテゴリーが抽出された。

《家族と世代をつなぐ》は、〈家族で力を合わせる〉、〈若い世代を呼び寄せる〉サブカテゴリーがあった。“（男性高齢者は）妻と子ども達の献立を相談する”“妻の身体状況を気遣いながら家事を分担する”等、〈家族で力を合わせ（る）〉家族で協力していた。また、老夫婦での民泊対応が難しい時には“（忙しい時には）島外の子も達を呼び寄せる”等、〈若い世代を呼び寄せ（る）〉、島外の子もたちの帰島頻度が増えていた。

《島の今と未来をつなぐ》は、“島の産業育成のために特産品のモズクをお土産にしている”、“民泊仲間にも島の特産品をお土産にするよう勧めている”等、〈島の産業を育成（する）〉していた。また、“子どもたちが島の観光大使になれるよう、何でも話して聞かせている”、“観光客が増えることを期待して、子どもたちに接している”等、〈島の観光大使になることを期待（する）〉して関わっていた。

4) 【共生の理解に貢献する】

辻らの生きがい就労の3つのコンセプト以外に新たなコンセプトとして、【共生の理解に貢献する】があり、《生きる大切さを育てる》、《自然との共生を育てる》カテゴリーが抽出された。

《生きる大切さを育てる》は、“（好き嫌いのある子どもには）空腹感をあじあわせる体験をさせる”、“朝食抜きの子もに潮干狩りで歩けなくなった時、朝ご飯を食べる必要性を伝える”等、〈食べることの必要性を伝え（る）〉ていた。

《自然との共生を育てる》は、“サトウキビを食べたことのない子どもたちに、その食べ方を説明し体験をさせている”、“島の魚で、魚の美味しさを味わせている”等、〈島にある食材を味わって

もらう) 体験をさせていた。また、“自然を守る大切さと、海の美しさを取り戻す役割があることを伝える”、“干拓で変化した湿原を見学し、自然を大切にすることを伝えている”という〈自然と共生する大切さを伝え(る)〉ていた。

3. 男性高齢者の生きがい就労のニーズ (表2)

男性高齢者の生きがい就労のニーズには、《島の産業として組織的に取り組みたい》、《食事サービスの質を向上させたい》、《古い(身体機能)に合わせて民泊がしたい》の категорияが抽出された。

《島の産業として組織的に取り組みたい》は、これまで観光地でなかった島には観光マップがないことから、“観光マップづくりは、行政も含めた島内外の関係者によるプロジェクトでつくる価

値があることを提案したい”、“修学旅行生のお土産は、地元の産業活性化につなげるようにシステム化してほしい”等、〈島の産業育成に組織的に取り組(みたい)〉む意欲を示し、“何もない島で民泊は現金収入になるので、継続したい”と〈民泊は島の産業として継続したい〉と語っていた。

《食事サービスの質を向上させたい》は、“民泊事業を継続するためには、民泊先の食事のメニューの均一化も必要と思う”等〈食事について検討する必要がある〉とのニーズがあった。

《古い(身体機能)に合わせて民泊がしたい》は、“(写真を見ながら笑顔で)子どもたちとの行動は楽しいが疲れるので、民泊を辞めたいと思っている”、“身体への負担を気遣いながら、民泊事業を継続したい”等の〈民泊は継続したいが、体を休めることができず疲れる〉と語っていた。

表1 男性高齢者の生きがい就労の実態

サブカテゴリー	カテゴリー	生きがい就労のコンセプト
〈身体の老化を意識して行動する〉 〈民泊は介護予防につながる〉 〈島の自然に触れ、互いに楽しむ〉	《介護予防で老いに適応する》 《関わりを楽しむ》	【働きたいときに無理なく楽しく働ける】
〈心地よい関係性づくりに配慮する〉 〈話題が合わなくても受け入れる〉 〈食事は好みを取り入れる〉 〈子ども達の安全管理をする〉 〈生活の経験を活かす〉 〈培った経験を活かす〉	《異なる価値を受け入れる》 《培った経験を活かす》	【現役時代に培ってきた能力・経験を活かせる】
〈家族で力を合わせる〉 〈若い世代を呼び寄せる〉 〈島の産業を育成する〉 〈島の観光大使になることを期待する〉	《家族と世代をつなぐ》 《島の今と未来をつなぐ》	【高齢者の就労が地域の解決の貢献につながる】
〈食べることの必要性を伝える〉 〈島にある食材を味わってもらう〉 〈自然と共生する大切さを伝える〉	《生きる大切さを育てる》 《自然との共生を育てる》	【共生の理解に貢献する】

表2 男性高齢者の生きがい就労のニーズ

サブカテゴリー	カテゴリー
〈島の産業育成に組織的に取り組みたい〉 〈民泊は島の産業として継続したい〉	《島の産業として組織的に取り組みたい》
〈食事について検討する必要がある〉	《食事サービスの質を向上させたい》
〈楽しいが、体を休めることができず疲れる〉	《古い(身体機能)に合わせて民泊がしたい》

IV 考察

1. 男性高齢者の生きがい就労の実態

A島の民泊事業は、辻らの提唱する生きがい就労の3つのコンセプト【働きたいときに無理なく楽しく働ける】、【現役時代に培ってきた能力・経験を活かせる】、【高齢者の就労が地域の課題解決の貢献につながる】を包含し、【共生の理解に貢献する】を加え、男性高齢者の生きがい就労につながっていた。

これまでの高齢者施策は、シルバー人材センターに代表されるような就労支援事業と介護保険制度による介護予防事業は、タテ割りで推進されている。就労支援事業への参加は男性高齢者が多く（全国シルバー人材センター事業協会：2012）、介護予防事業の参加は女性がほとんどである（大久保：2005）。そして、男性高齢者は、地域のネットワークに馴染みにくく孤立化や介護予防事業の参加率が低いことが課題となっていることが報告されている（鳩野・田中：1999、平井ら：2005、大久保：2005）。

A島の民泊事業では、子どもたちと《関わりを楽し（む）》み、《異なる価値を受け入れ（る）》、《培った経験を活か（す）》し、《家族と世代（をつなぐ）》、《島の今と未来をつな（ぐ）》ぎ、《生きる大切さ（を育てる）》と《自然との共生を育て（る）》ていた。その活動は、〈身体の高齢を意識して行動（する）〉し〈漁師の経験（を活かす）〉や〈生活の経験を活か（す）〉し、限界集落を遅らせるという地域の課題に取り組むために〈島の産業（を）の育成（する）〉や〈若い世代を呼び寄せ（る）〉、〈民泊は介護予防につながる〉と語っていた。このように、男性高齢者は、介護予防を目的とした事業より、老化を意識しつつ、これまでの生計就労を活かし地域の課題を解決するための生きがい就労を目的とした事業に参加することで介護予防につながる可能性が示唆された。

また、生きがい就労のコンセプトに、生きる大切さや自然との共生を育てる【共生の理解に貢献

する】が加わっていた。A島は、豊年祭「ミヤークツツ」や御嶽信仰の風習を今でも色濃く残している（松居：1999）。このような地域の特徴に長い生活史を持つ島の高齢者は、自然と共生する価値が強化され、島外からの来訪者をもてなす島民のホスピタリティ（野口：2011）としてその価値を伝承していると考えられた。

2. 男性高齢者の生きがい就労のニーズ

男性高齢者の生きがい就労のニーズは、《島の産業として組織的に取り組みたい》、《食事サービスの質を向上させたい》、《老い（身体機能）に合わせて民泊がしたい》と民泊事業を発展させるためのポジティブニーズを語っていた。

島崎（1974）は、生きがいの捉え方は性によって異なり、女性は仲間と一緒にいることを“居がい”とし、男性は目標にむかって自分から進んでいくことを“行きがい”とすると報告している。

性差に着目し、生計就労で培った組織的に問題解決ができる男性の特徴を活かし、“行きがい”に繋げることができれば、地域の課題解決にも貢献でき、男性高齢者の生きがいづくりにも活かせるという好循環が期待できる。生きがい就労のニーズの語りから男性高齢者は、地域の課題解決の主役としての役割が発揮できる存在であることを示唆していた。

3. 男性高齢者の新たな介護予防の支援方法

高齢者の葉っぱビジネスで、生きがいづくりを推進している徳島県上勝町では、その立役者として、地域の資源を活かし、高齢者が自発的に精を出して笑顔で働けるように出番を作り、情報でやる気を育てるプロデューサーの存在があった（横石：2009）。

A島においても、高齢者を主役とした島外の修学旅行生の民泊事業を仕掛けたB福祉支援センターの存在があり、高齢者を島の最大の資源として、高齢者の出番を作る取り組みが継続的に発展

的に取り込まれている。

男性高齢者の新たな介護予防の支援方法として、若い(身体機能)に適応しつつ、男性が社会システムで培ってきた知恵と力を見抜き、組織的に地域の課題が解決できる人材、長く生きてきた経験に基づく生きる大切さや自然との共生を具体的に継承できる人材としてのプロデュースが求められる。男性高齢者を人材としたプロデュースによって、男性高齢者は、生きがい就労に携わることが可能になる。生きがい就労と介護予防を区別して取り組むのではなく、介護予防のために生きがい就労を推進するという新たな介護予防の支援方法が必要であると考えられる。

V 結論

1. A島の民泊事業は、《介護予防で老いに適応する》、《関わりを楽しむ》、《異なる価値観を受け入れる》、《培った経験を活かす》、《家族と世代をつなぐ》、《島の今を未来につなぐ》があり、辻らの生きがい就労のコンセプトを包含し生きがい就労につながっていた。加えて、《生きる大切さ(を育てる)》や、《自然との共生を育てる》という【共生の理解に貢献する】の新たなコンセプトが導かれた。介護予防のために生きがい就労を推進するという新たな介護予防の支援方法が必要であると考えられる。
2. 男性高齢者の就労ニーズは、《島の産業として組織的に取り組みたい》、《食事サービスの質を向上させたい》、《若い(身体機能)に合わせて民泊がしたい》と民泊事業を発展させるためのニーズがあった。男性高齢者は、地域の課題解決の主役としての役割が発揮できる存在であることを示唆していた。
3. 男性高齢者の新たな介護予防の支援方法は、介護予防を目的とした活動より生きがい就労による介護予防を推進することであると考えた。

謝辞

調査にご協力頂きました研究参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。なお、本研究は平成24年度沖縄県立看護大学学長奨励研究の助成を受けたものである。

文献

- 秋田成就 (1983) : 「生きがい就労」事業としての高齢者事業団制度について, 社会労働研究, 29(3), 133-161.
- 秋山弘子・前田展弘 (2013) : 長寿社会の理想の生き方・老い方, 東京大学高齢社会総合研究機構, 東大がつくった確かな未来視点を持つための高齢社会の教科書, 69-89, 株式会社ベネッセコーポレーション, 東京.
- 大久保豪 (2005) : 介護予防への男性参加に関連する事業要因の予備的検討 介護予防事業事例の検討から, 日本公衆衛生雑誌, 52(12), 1050-1058.
- 鎌田実 (2012) : 2030年に向けたロードマップの提言, 東京大学ジェロントロジー・コンソーシアム, 2030年超高齢未来破綻を防ぐ10のプラン, 75-188, 東洋経済新報社, 東京.
- 管野仁 (2003) : ジンメル・つながりの哲学, 日本放送出版協会, 東京.
- 島崎敏樹 (1974) : 生きるとは何か, 岩波書店, 東京.
- 辻哲夫 (2011) : 平成22年度研究開発実施報告書「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」
http://www.ristex.jp/korei/02project/pdf/tsuji_pj_h22_houkoku.pdf
(2014年1月31日現在).
- 全国シルバー人材センター事業協会 (2012) : 平成24年度全国統計.
http://www.zsjc.or.jp/toukei/toukei_pdf?id=7 (2014年1月7日現在).

野口美和子（2011）：島嶼看護高度実線指導者の育成と将来への展望，沖縄県立看護大学紀要，12，149-154.

鳩野洋子，田中久恵（1999）：地域ひとり暮らし高齢者の閉じこもりの実態と生活状況，保健婦雑誌，55(8)，664-669.

平井寛，近藤克則，市田行信，末盛慶（2005）：「健康の不平等」研究：高齢者の閉じこもり，

公衆衛生，69(6)，485-489.

松居友（1999）：沖縄の宇宙像 池間島に日本のコスモロジーの原型を探る，洋泉社，東京.

宮地克典（2010）：大河内理論と高齢者就労－高齢者事業団との結びつきを中心に－，経済学雑誌，111(2)，76-94.

横石知二(2009)：生涯現役社会のつくり方，ソフトバンククリエイティブ株式会社，東京.

Current status and needs of older men who are “Working to make their lives meaningful” : Case narratives from island A

Hatsuyo Yamaguchi. Akemi Ohwan. Masayoshi Sakugawa. Yuki Taba.
Saki Eiguchi. Mineko Okawa. Hitomi Itokazu. Rumi Bando. Hiromi Maedomari.

Abstract

[Purposes] The objectives of this study were to investigate the current status and needs of a group of older men who are "working to make their lives meaningful" by engaging in home-stay business on Island A and to discuss new care prevention support for older men in general.

[Methods] Participants were four older men engaged in a home-stay business on a remote island off the coast of Japan. Key sentences were extracted from interview transcripts about the participants' home-stay business and their need to work, and they were analyzed inductively based on the concepts of "working to make life meaningful" developed by Tsuji et al., namely, "Not stressful and enjoyable work whenever one wants," "Using skills and knowledge gained during previous employment," and "Contributing to local issues."

[Results] Analysis demonstrated that these three concepts were manifested in the interview data from these older men. In addition, a new concept, "Contributing to an understanding of cooperative living," was evident. Regarding their needs to work to make their lives meaningful, the following three motives were reported: "Being systematically engaged in a home-stay business as an island industry," "Improving meal services," and "Working in accordance with one's age and physical capabilities."

[Conclusions] The island-based home-stay business appeared to help the older men in the study create work that imparted great meaning for them—that helped give meaning and purpose to their lives. The new concept of "Contributing to an understanding of cooperative living" added to the overall concepts of working to make one's life meaningful. The results also showed that older men can play an important role in addressing local issues. To prevent older men becoming care recipients, promoting work to make one's life meaningful may be useful as a new care prevention support program.

Key words: older men, work to make life meaningful, working needs, involvement, care prevention